芦屋大学論叢　第77号
（令和4年8月8日）抜刷

《研究ノート》

日本初モンテッソーリ感覚教具を導入した ベラの教育思想と教師像

－ユキコ・アーウィン著『フランクリンの果実』を通して－

安　藝　雅　美

《研究ノート》

日本初モンテッソーリ感覚教具を導入したベラの教育思想と教師像

－ユキコ・アーウィン著『フランクリンの果実』を通して－

安藝（あき）雅美
芦屋大学臨床教育学部

はじめに

20 世紀初頭に登場したイタリア出身のマリア・モンテッソーリ（Maria Montessori,1870-1952）が提唱したモンテッソーリ教育法は，現在も世界中の就学前教育に影響を与え続けている。

日本においても戦前から多くの研究者や教育者がモンテッソーリ教育に関心を寄せた記録が残っている。しかしながら、ベンジャミン・フランクリンの直系 4 代目の子孫，ソフィア・アラベラ・アーウィン（＝ベラ）という人物が、「モンテッソーリの感覚教具を日本に紹介した最初の人であり，フレーベルの教育法を伝えた第 3 番目の人だった。」（フランクリンの果実より）ということはあまり知られていない。また、ベラは 1916 年（大正 5 年）には「最良の教育は最良の教師にあり」と考え、幼児教育の基となるキリスト教的人間愛による保育者の育成を行うため、私財を投じて玉成保姆養成所（＝現在のアーウィン学園）と幼稚園を設立し、そこではベラ独自の教育観によって保育者養成を行った。

本研究では、姪の著した『フランクリンの果実』を通して、ベラの生い立ちとそこから培われた教育思想と教師像を紐解く。

1、研究に至る経緯

日本では，1912 年（明治 45 年）当時の主要新聞の一つである『萬朝報』（第 6633 号）で「最近各国に行はるるモンテスソリ教育を見よ。欧州諸国の教育方法は僅々数年間に全くその面目を一新せるものなり」[1]「同式によりて教育せらるる児童は静粛たるべしと教わるる代わりに、活動すべしと教えらるるなり。放任主義の教育を授くるに非ずして，放任し得る児童足らしめんとするなり」。この『萬朝報』の紹介をきっかけにして我が国におけるモンテッソーリ教育への関心が一挙に高まり，多様な人々によるモンテッソーリ教育についての紹介が行われることになる[2]。

大正自由教育の流れの中、欧米の教育情報が積極的に文献で紹介され、海外視察が行われ、海外から教師を招いて講演や講習会が開かれるなど、新しい教育を見出そうとした時期でもあった。幼児教育界においても同じであった。特に，東京女子師範学校教授で『幼児と教育』の編集及び執筆を担当した倉橋惣三が、フレーベル主義による恩物に偏った「手技」の保育を批判したことへの影響は大きく，現場の保育者たちに対して、新しい保育を構築するための講習会と保母不足を解決するための保母養成講習会が盛んに開かれた。さらに、木村久一による『早教育と天才』が出版されるなど早教育への関心が高まった時期でもある[3]。

吉岡剛（1993）[4] は，『モンテッソーリ教育の道』の中でこの時期の現場の実際的取り組みとして，大正 2

年神戸市立幼稚園・3 年に大阪江戸堀幼稚園・京都豊園幼稚園と筆頭に，大正 3 年の『大阪毎日新聞」は幼小含めて東京 5・京都 2・神戸 2・秋田 1・米子 1・広島 1・三原 1 としている。昭和 10 年の文部省調査では「モンテッソーリ教育を加味する」園は 10，フレーベルとの両用の園は 252 としている。また，頌栄保母養成所のハウは履修科目にこの教育を組み込み，ローマで直接学んだベラ・アーウィンは自身の養成所で講義内容にそれを含め附属幼稚園で感覚練習を積極的に実践していた。と，ある。

しかしその後，竹田康子（2016）[5] は，「モンテッソーリ教具成立過程の研究 ―セガンからブルヌヴィルを経てモンテッソーリへ―」の中で，神戸幼稚園・姫路師範学校附属城北幼稚園・島根県師範学校附属幼稚園・日本女子大学附属豊明小学校・長野師範付属小学校でモンテッソーリ教育を取り入れたという研究があるが，いずれも正式なモンテッソーリ教具は用いられていない。また、モンテッソーリの教師養成コースを受講し教具を伴う実践を学んだ人の関与もなかったと論考している。

明治45年（1911年）	1／1	・「ﾓﾝﾃｽｿﾘ教育」『万朝報』（最初のﾓﾝﾃｯｿｰﾘ教育法の紹介）
	6／2	・倉橋惣三「保育の新目標」京阪神連合保育会講演（倉橋と京阪神連合保育会との最初の結び付き）
	8月～	・野上俊夫「ﾓﾝﾃｯｿｰﾘ女史の科学的教育学を読む」『教育学術界』25巻5号～26巻6号（ﾓﾝﾃｯｿｰﾘ教具の図説）
	11／2	・神戸市善隣幼稚園にｱﾒﾘｶより小冊子『ﾓﾝﾃｯｿｰﾘ女史教育的器具』贈られ、神戸幼稚園で翻訳される。
大正2年（1913）	2月	・神戸幼稚園望月くに、神戸保育会総集会にて自作のﾓﾝﾃｯｿｰﾘ教具披露（竹の皮の触覚練習具、着脱人形、小さいﾋﾟｱﾉ）
	4／15	・佐藤満寿「ﾓﾝﾃｯｿﾘｰ氏教育的器具に就て」『京阪神連合保育会雑誌』
	4／20	・野上俊夫「ﾓﾝﾃｯｿﾘｰ教育法」（大阪西区保育会講習会）－自作のﾓｯﾃｯｿｰﾘ教具持参
	7月	・ﾌﾚｰﾍﾞﾙ会第18回総会の席上、ﾌﾚｰﾍﾞﾙ館「ﾓﾝﾃｯｿﾘ式教育具出品」
	9／15	・大阪天真堂ﾓﾝﾃｯｿｰﾘ教具販売。解説書・清水幾多郎『ﾓﾝﾃｯｿｰﾘ教育法 教育界の奇跡』が同時販売
大正3年（1914）	1／1	・河野清丸日本児童学会例会で「ﾓﾝﾃｯｿﾘｰ博士の教授用具に就て」講演
	2／1	・河野清丸「ﾓﾝﾃｯｿﾘｰ博士の教授用具に就て（上）」『児童研究』17巻6号（日本児童学会例会演説内容掲載）
	6／1	・河野清丸「ﾓﾝﾃｯｿﾘｰ博士の教授用具に就て（下）」『児童研究』17巻7号（日本児童学会例会演説内容掲載）
	7／25-	・河野清丸『ﾓﾝﾃｯｿﾘｰ教育法と其応用』同文館
大正4年（1915）	3月	・河野清丸「ﾓﾝﾃｯｿﾘｰ氏の教育法」（京都保育会講演）
	3／10	・ﾌﾚｰﾍﾞﾙ館ﾓﾝﾃｯｿｰﾘ教具販売
	9／17	・『婦人と子ども』15巻3号にﾓﾝﾃｯｿｰﾘ教具の広告掲載（これより数号にわたってﾓﾝﾃｯｿｰﾘ教具の広告掲載）
昭和3（1928年）		・河野清丸『ﾓﾝﾃｯｿﾘｰ教育法真髄』北文館
		・河野清丸『門氏教育法及批判』北文館（ﾓﾝﾃｯｿｰﾘ教具の解説書）

表 1：モンテッソーリ教具に関わる事項年譜」（西川ひろ子 2009）

また，西川ひろ子（2009）は「近代日本におけるモンテッソーリ教育法の実践」の中で，フレーベル館からのモンテッソーリ教具販売までの過程をまとめた（表１）。[6]

吉岡と竹田の研究では，ベラ・アーウィンの動向についての認識の相違がある。西川の研究においてもモンテッソーリ教具の普及は記されているが，それが実際にモンテッソーリの教師養成コースを受講し教具を伴う実践を学んだ人の関与は記されていない。

そこで，本研究では上記，吉岡剛記載のローマのモンテッソーリ養成校で学んだベラ（＝ベラ・アーウィン）について，その姪に当たるユキコ・アーウィンが著した『フランクリンの果実』[7] からベラ・アーウィンのモンテッソーリに関わる動向と，ベラの目指す教師像を検討することとする。著書の中では，ユキコ・アーウィンからの目線のため，ベラは伯母となっている。

２．祖父ロバートと祖母イキについて

（１）アメリカから来た青年，祖父ロバート[8]

ロバート・ウォーカー・アーウィン（Robert Walker Irwin、1844 年 1 月 7 日－1925 年 1 月 5 日）は、デンマークで生まれ、22 歳のときに太平洋郵便汽船会社の横浜駐在代理人として来日した。貿易商として活躍していたロバートは、1880 年（明治 13 年）に横浜駐留ハワイ国総領事が帰国のため不在となる期間、同国総領事代理を務めたことからハワイ王国との繋がりができ、1881 年（明治 14 年）6 月には正式に総領事に就任、その後、1885 年（明治 18 年）1 月より駐日ハワイ国代理公使、1886 年（明治 19 年）9 月より同弁理公使などを務めた。

また、ロバートは同時期に「ハワイ国移民事務局特派委員」にも就任し、当時日本からの集団移民を強く求めていたハワイ王国の要望を実現するため、積極的な交渉を行った。ロバートの努力の甲斐あって、1885 年（明治 18 年）に日本からハワイへの集団移民が開始され、以後 1894 年（明治 27 年）まで計 26 回にわたり約3万人の日本人移民がハワイへと渡航した。

1898 年（明治 31 年）、ハワイ王国が米国に併合されたため、ロバートは弁理公使を解任された。しかし、彼はその後も台湾製糖株式会社発足に関わるなど経済界で重きをなし、1924 年（大正 13 年）に 81 歳で亡くなるまで日本に滞在し続けた。[9]

彼の体内には、古いスコットランド貴族の血と新興国アメリカ建国の祖の一人ベンジャミン・フランクリンの直系の子孫の血が流れていた。幼いころから教育熱心な父母に英才教育を施され，英国式の礼儀作法，騎士道的な道徳を叩き込まれていた。

商用で長崎と横浜の間を頻繁に往復していた或る日，横浜の両替屋に立ち寄り，そこの主人と話をしていたところ，茶菓を運んできたイキに一目ぼれをした。その時ロバート 24 歳，イキは 16 歳であった。

（２）日米結婚第一号[10]

妻の武智イキ（1857－1940）は信州飯田の商家・林金造の三女で、10歳 のとき、元土佐藩士で浅草橋場町（現橋場）の海産物問屋、武智惣助の養女となった。イキの実家の林家は，イキの曾祖父弥七の時代に最も栄え，一家には学者や知識人が輩出された。弥七の次男がイキの祖父の金三郎である。彼は江戸に出て日本橋木挽町に居を構え，弟の助けで尾州藩，佐竹藩，仙台伊達藩の御用達となり，巨万の富を築いたのであった。イキの父金造は金三郎の長男で，和歌，茶道，器物の鑑識に長じた風流人だった。父の弟の後藤三右衛

門が天保改革の犠牲となり処刑された後，林家は苦境に陥った。しかし，林家の教養と家風は維持され，イキはそれを受けて美しく才能豊かな少女に育って行った。

イキの母は嫡男を生まなかったため実家に帰された。そのため，イキは10歳の時，元土佐藩士でその頃海産物問屋を江戸で手広く営んでいた武智惣助夫妻に懇望され養女となった。女子一通りの教養を授けられたイキは，子どものなかった夫妻に我が子のように可愛がられて育った。

16歳の或る日，イキは養父の友人を頼って横浜にやってきた。その家の店先に現れた異人さんをもっと近くで見ようと，好奇心あふれるイキが茶菓を出すのを口実に現れた時，ロバートが見初めたのだ。しかし，外国人は日本人を未開人として軽蔑し，日本人は外国人を毛唐としてさげすんでいた時代だった。ロバートは，アメリカにいる母や兄姉妹，親類の反対にあい，イキもうんと言わなかった。しかし二年間通い詰めてついに射止め，18歳の妻を伴って，長崎の亜米一支店に戻っていった。しかし，正式な結婚として法的に認められたのは日本側で6年後、米国側で12年後の1882年となった。この日米結婚第一号の書類は東京公文書会館に保管されている。

結婚の翌年1871年に長女が生まれたが夭折する。以後12年間，彼等は子宝に恵まれなかった。

（3）アラベラの誕生[11)]

ロバートは，三井物産や共同運輸ともコミッション契約であり，40歳になる頃には既に巨満の富を築き，三井と匹敵するほどの大富豪になっていた。明治13年，ハワイ国総領事を臨時に引き受けていた13日の期間中，ロバートの誠実な人柄と完璧に近い受け入れ準備に親しく接し，彼の家柄，政治力，財力に感服したハワイ皇帝は，その場でロバートをハワイ国全権公使兼総領事に任命した。37歳の時である。その後，ハワイがアメリカ合衆国に合併された明治31（1898）年8月12日まで17年間を，日本人のハワイ移住に全力を挙げて貢献した。

明治14（1881）年3月4日，時のハワイ皇帝カラカウアの訪日をきっかけに，ベンジャミン・フランクリンを殊の外尊敬されていた明治天皇と皇后は，ロバートとイキに特別な親しみを示され，ロバートも終生明治天皇に対する敬愛の念を持ち続けた。

また，イキも皇后から「貴女は日本婦人として，良く勇気をもって外国の男子との結婚に踏み切ってくれました。さぞかし，人に言えない色々な悩みがあることでしょう。貴女は日本とアメリカの間に，一本の橋をかけ渡してくれたのです。どうか，しっかりがんばってください。勇気と健康を持ち続けるように。ありがとう。御苦労さま」とお言葉を賜ったことから始まり，その後再三子どもの健康，教育などについて皇后がイキに親しく話しかけられた。これら，自分の苦労を認めてくれた人がいるという感激をイキは終生忘れることがなかった。

ロバートの深酒と芸者遊びに悩まされ10年以上子がなかったが，ハワイ公使に任命されてから二年目に，39歳のロバートと31歳のイキの間に，待ちに待った子（ベラ）が生まれた（1883年（明治16年）11月24日）。その女の子は，ロバートが敬愛して止まなかった，フィラデルフィアに住む母ソフィア・アラベラ（Sophia Arabella Bache）に因んで，ソフィア・アラベラ（通称ベラ）と名付けられた。その後次々と二人の間には合計6人の子どもが生まれたが，二人にとって長女ベラは特別な存在であり，ベラもまた二人の期待に添って，親孝行で理想的な娘に育っていった。当時，日米混血児は稀な存在だった。世間が子ども達をどのように受け入れるか，全く未知数だった。子ども達がどのような環境におかれても，へこたれずに生き延びる事が出来るためには，彼等に最高の教育を与えるのが一番の武器になる，と二人は考えた。ベラはミス・ハート・スクール卒業後，コロンビア大学で夏期講習を終え，イタリアに渡り，アリア・モンテッソー

リ博士の許で直接モンテッソーリ児童教育法を学び，ドイツでフレーベルの母と子の遊戯の研究を重ね，更にロンドンの貧民街の施設で実地訓練を受けるなど，児童教育の根本を深く学んだ。

アメリカ人でありながら外国（デンマーク・コペンハーゲン）に生まれ，外国人（日本人）の妻を持ち，外国（ハワイ）を代表したロバートにとって，彼の愛した二つの国は，どちらも所詮異国であった。心の，淋しさのはけ口を宗教に，家族の愛に求めたロバートは，混血の子ども達の行末を案じつつ，麹町上二番町の自宅で，最愛の子ども達に見守られて，大正 14（1925）年 1 月 5 日，数奇だった 81 年の生涯の幕を閉じた。

3．父リチャードと伯母ベラの章ついて

（1）ユキコと伯母のベラ [12)]

ユキコの父リチャードが38歳で自らの命を断った。アーウィン家側は，ユキコの母である市子が一人で二人の子どもを立派に育てるべきだと主張し，そのための経済援助は惜しまない旨申し出た。市子の実家渡部家側は，28 歳でまだ若く美貌だった市子は再婚すべきだと主張し，更に，市子が再婚した後も子どもたちの養育費は，アーウィン家側で支払うべきだと主張した。板挟みにあった市子は，遂に夫の死後一年たった或る日，二人の子どもの将来をアーウィン家に託す決心をして，子どもを姑のイキの許において去った。7 歳の武雄と 4 歳の雪子を引き取った時，祖母のイキは 77 歳，同居の伯母ベラは 46 歳だった。ベラは，13 歳から 18 歳までの成長期を過ごしたアメリカで，徹底的に清教徒教育を受けた。信仰深いアメリカの父方の祖母によって，ベラは真剣に祈るという事を学んだ。それは，自分の心に神格をよびおこし，不可能を可能する力を得る術だった。その時ともされた「燈」は，ベラの心から一生消えることがなかった。日本に戻ったベラは，毎日母にキリストの話をし，聖書を読んで聞かせた。仏教の素養のあったイキは，ヤソ教の愛は仏教で説く慈悲で，聖母マリアは観音様で，天国は極楽と同じだと思っていたので，一向に違和感を持たなかった。それよりも，ベラの心の成長ぶりに心を打たれた。人の悪口を一切言わず，物事の良いところだけを見て，父母を助けて家庭の役に立とうと真心から思い，一生懸命努力している我が子の姿を見て，イキは感動した。若いベラをここまで育て上げたヤソ教にはきっと何かがあるとイキは感じた。そして，49 歳の母は 18 歳の娘についてヤソ教を勉強し始めた。

ベラは，幼児を魅了する不思議な力を具えていた。それはベラ自身が子どもと同じ魂の持ち主であり，「永遠の子ども」としての素質を持っていたからだった。ベラは天衣無縫，生涯無垢な魂をもっていき続けた。

また，華族出身の外交官青年と激しい恋が芽生えたが，古い家柄を誇る華族の人達の混血に対する嫌悪と偏見に直面し，外国人との結婚を禁じていた外務省の規則を前にして，厚い壁にぶつかって懊悩する恋人を見た。ベラは異端者を受け入れない日本人社会の深層に触れ，絶望に近い気持ちを味わわされ，二人が結婚に踏み切ることは，彼を家族から引き離し，社会的に葬ることになるのを悟った。彼女はこの恋から身を引き，幼児教育勉強のため，再渡米することを決めた。

（2）モンテッソーリとフレーベル [13)]

ベラは，アメリカで青年たちに対する気持ちが友情以上には発展しなかった。それはベラが底抜けに明るいアメリカの男性よりも不可解なほど内向的で，それゆえ神秘的に見える日本の男性に魅かれる傾向があっ

たからだ。この宿命的ジレンマのためにベラは生涯を独身で過ごすことになる。

ベラは一度日本に帰国した後，ヨーロッパへの留学を志し一年後に出発した。イタリアで開かれる，モンテッソーリ新教育法の初の国際コース受講のためと，ドイツ，マリエンタールのフレーベル学園で，フレーベル教育法を学ぶためだった。マリア・モンテッソーリ女子の評判は，米国で勉強していたベラの許にも聞こえていた。幼児教育の祖とよばれる，ペスタロッチの系統を汲むフレーベルと同じく，人間は宇宙に連なる魂を持って生まれてきていると信じていた。彼等は，児童は 2 歳から 6 歳までの間に，環境に順応する技術を発展させると説き,この期間は最も大切な時期に児童の中にある自然の目を伸ばすことが必要である，と説いた。この方法論として，二人とも上から押しつける方法を止め，子どもの立場になって考え，のびのびとした環境で学ぶことの喜びを与えつつ，それぞれの特長を伸ばすことを主張した。子どもの人格を認めたこの教育論は当時としては画期的なものだった。フレーベルとモンテッソーリの大きな違いは，前者のアプローチが宗教的で，メタフィジカルであり，後者は近代生理学と心理学に基づいていることだった。この二つのプラグマティック（実際的）で，メタフィジカル（哲学的）な教育方法を取り入れて，ベラはのちに彼女独特の教育分野を開いたのだった。

スイスでペスタロッチにより興された幼児教育は，ドイツ人フレーベルに継承され，イタリアのモンテッソーリによって新機軸を得，それは日本においては，日本の血を引くアーウィン・ベラによって開花させられたといっても過言ではない。ベラは，モンテッソーリの感覚教具を日本に紹介した最初の人であり，フレーベルの教育法を伝えた第3番目の人だった。今このことを日本で知る人は殆どいない。また彼女の天才的教育法を知る日本人も殆どいない。

（3）玉成保母養成所[14)]

日本はまだ幼児教育の草創期にあった。ベラは麹町の自宅を開放し幼児教育研究サロンを開いた。そこで，日本の幼児教育に当たる人々のための養成機関の不足，その水準の低さを発見した。31 歳のベラは，幼稚園と同時に保育者のための学校を作りたいと思うようになった。そして，彼女の超人的努力の結果，2 年後の大正 5（1916）年，政府から許可がおり，麹町の自宅から 20 分ほどの所に私立玉成保母養成所，及び附属幼稚園が呱々の声を上げた。

ベラの完璧主義を反映し，学校の各課目の教授陣は，帝国大学（現東京大学），東京教育大学（現筑波大学），東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学），東京美術学校（現東京芸術大学），帝国美術会員等に属する錚々たる人物だった。第 1 回の玉成の生徒は 12，3 名であった。生徒が少数でなければ人格的交流が十分できず，したがって十分な感化薫陶はできないというので，その後長い間 12，3 名より他は入学を許されなかった。ベラは開講から 10 年，父の死まで，麹町の校舎で大正の寺小屋的なしかし活気のあふれた保母学校と幼稚園に心魂をささげたのだった。教師としてのベラは想像以上にきびしく厳格で，個人としてのベラは底抜けの愛情に満ちていた。ベラは麹町時代の幼稚園児童を「私のかみよ（神代）時代のお子達」と言って，その成長を楽しみにしつつ，彼等とのつながりを大切にし，交際は彼女が死ぬまで続けられた。ベラが幼児教育に熱中していたころ日本とアメリカをつなぐ太平洋の浪は荒れ始めていた。日本は中国侵略したことによって世界から完全に孤立してしまった。一方，10 年の間にベラと玉成の評判は，日本中に広まり養成所入学希望者の数は増加する一方だった。ベラは，コロンビア大学で行われる幼児教育夏期講習会に参加するのを機に，新校舎設立のための基金をアメリカで募るために，大正 13 年 4 月横浜を発った。41 歳だった。8 ヵ月の滞在中，日本人男性との間に恋が生まれた。しかし，やりかけた仕事に対する責任感と情熱がとうとう女としての愛に打ち勝った。81 歳の父ロバートが日本に向けた船上でこの世を去ったこと

を知り，悲嘆に暮れた。父の精神的支えと経済的援助を失ったベラの生活は，百八十度転換した。慈悲のすべてを学校のために費やした。ベラの心には，「汝等何を着んと，衣の事を思い煩うや。野の百合をみよ。紡がず，織らざるなり。栄華を極めるソロモンに，その装い，この花の一つにもかざりき」という，キリストの言葉が深く刻まれていたのである。

（4）ソフィア・アラベラの死

ユキコがテドと結婚し，ドイツに居た頃，日本のベラは乳癌の手術を受けていた。病名を伝えず無事に成功したとユキコには伝えていたが，しばらく伯母から返事がこないのを心配していたユキコの許に，七月の或る日，親戚の林博子さんから封書が届いた。手紙の中の一行に「ベラさんが 6 月 12 日の午前零時脳血栓で天に召されました」（＝1957年（昭和 32 年）6 月 12 日）とあった。ベラが口癖のように「貴女が私の後を継いで玉成をやるのですよ。」と言っていた思いを感じていたユキコは悲しみと後悔に押しつぶされそうになった。しかし、玉成の 2 代目は心理学博士の武政太郎先生が就任したと書いてあり、胸をなでおろしたユキコであった。

（5）蒔かれた種・魂の遺産

1980 年の春，ユキコの手許に分厚い『荒野に水は湧きてベラ・アルウィンの生涯』[15] と題するアルウィン学園，玉成保育専門学校によって発行された本が届いた。5人の卒業生が12年の歳月を費やし，心血を注いで書き上げたユキコの伯母，ベラの伝記だった。そこには、「体当たりの情熱で生徒を愛し、叱り、躾た伯母の姿が余すところなく綴られていた。」[16] と記されている。

まとめ

今回は，ソフィア・アラベラ・アーウィン（Sophia. Arabella. Irwin）の教育思想を，ユキコ・アーウィンの著書を通した視点から検討した。

ベンジャミン・フランクリンの末裔であるアメリカ人の父と日本人の母の長女として誕生し，父がハワイ公使であったこともあり、裕福な家庭に生まれ育ったが、生い立ちの日系二世故のいじめや苦悩も経験した。ベラの教育思想は，このような混血児であるという内面的な思いを抱えながら，祖母（父方）の影響 で，キリスト教の信仰心を支えに生きてきた。雙葉学園小学校を卒業後、父の実家であるアメリカのフィラデルフィアで祖母と過ごした日々の中で、祖母から「神の前に人は皆平等である」というキリスト教の信仰心とフランクリンの末裔であるという誇りを持ち，深い愛情を受けて育った。祖母の深い愛情と信仰心により，ベラは二世であるという劣等感を乗り越えられたのである。祖母の信仰心がベラの心に信仰心を育み，キリスト教主義の幼稚園と養成所を創立する教育思想の根底となったと考えられる。しかし，結婚問題に関しては、二世であるが故の苦悩があり，結婚せず生涯、幼児教育の道に進むきっかけとなった。2 度のアメリカ留学とドイツの「フレーベル学園」，イタリアで初の「モンテッソーリ国際コース」にも留学し幼児教育のプロフェッショナルとして見識を深めた。

著書を通して，ベラの教育思想は，下記のポイントがあげられるのではないだろうか。

1）フレーベルとモンテッソーリの大きな違いを，前者のアプローチが宗教的で，メタフィジカルであり，後者は近代生理学と心理学に基づいているとし，この二つのプラグマティック（実際的）で，メタフィジカ

ル（哲学的）な教育方法を取り入れ，彼女独特の教育分野を開いたこと。
２）ベラの深い信仰心と，幼児を魅了する，子どもと同じ魂の持ち主で，「永遠の子ども」としての素質を持っていた。というところである。モンテッソーリ女史自身も，敬虔なクリスチャンであり信仰心が篤く，医学的見地と哲学的見地の両方を持ち合わせ統合させた教育法としてモンテッソーリ教育法を提唱した。その中での教師像は、「教師は忍耐強く子どもたちに期待しつつ，沈黙を守り，受動的な態度を取りつづけなければなりません。子どもたちの精神が自由に羽を広げる空間を持てるようにと，自分の個性を無にするために身を引いていなければなりません」[17] とある。すなわち，ベラもモンテッソーリの教師として，子どもを信じて待つという忍耐と哲学的実際的な教育思想を併せ持つリーダーであったことが伺える。

今日、教育界における「学校のリーダーシップ論」として，佐藤（2018）は，「トニー・ブッシュ（Tony Bush）は，自著において，自律的学校経営は学校の効果と効率の潜在力を高めるが，学校のリーダーシップと組織運営次第だと述べている（Bush 2011：14）[18]。」とし，「日本においても，学校経営の「自律性」を超えて，教員養成の実践性の重視，スクールリーダー研修，エビデンス・ベースドの教育改革，少子化による学校教育と教員養成の縮小傾向などの影響も受けているため，近年の現象は複合的に捉える必要がある。」としている。この点は、モンテッソーリが提唱する教師像とモンテッソーリ教師を育成する教師養成コースに課題の解決糸口が包括されていると考えられる。

今後は，ベラの学校経営とリーダーシップ論を中心にアルウィン学園に残る資料やアルウィン学園発行『荒野に水は湧きてベラ・アルウィンの生涯』を通して検討する。

引用文献

1）吉岡剛：モンテッソーリと日本，クラウス･ルーメル編：『モンテッソーリ教育の道』，p53学苑社，1993.
2）前之園幸一郎：戦前日本におけるモンテッソーリ教育の歴史，モンテッソーリ教育48号，52-63，2015.
3）西川ひろ子：近代日本におけるモンテッソーリ教育法の実践，チャイルド・サイエンスVOL.5，p54-57，2009.
4）1）吉岡剛同上書.
5）竹田康子：モンテッソーリ教具成立過程の研究－セガンからブルヌヴィルを経てモンテッソーリへ－，大阪大学博士（人間科学）論文，2016.
6）西川ひろ子：近代日本におけるモンテッソーリ教育法の実践，チャイルド・サイエンスVOL.5，pp54-57，2009.
7）ユキコ・アーウィン著『フランクリンの果実』文藝春秋，1988.
8）7）同著，pp9-11.
9）外務省サイト：外交史料Q&A 明治期（日本語）.
https://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/qa/meiji_03.html
10）7）同著　pp11-20.
11）7）同著　pp20-28.
12）7）同著　pp28-38.
13）7）同著　pp38-42.
14）7）同著　pp42-50.
15）「Irwin」というファミリーネームを，本著「フランクリンの果実」では「アーウィン」とユキコ本人が訳しているが，アルウィン学園では、全て「アルウィン」と訳されている。その為論文等においても両方の表記が見られる.
16）7）同著，pp418-423.
17）モンテッソーリ著 中村勇訳『子どもの精神』日本モンテッソーリ教育綜合研究所，2004年，p296.

18）佐藤博志：教育経営学の伝統と刷新―欧米キャッチアップからグローバルなアリーナへ―，日本教育経営学会紀要第 60 号，pp98-110，2018年.

謝辞

ベラの関係図書については，芦屋大学臨床教育学部特任教授，三羽光彦先生がご提供くださり大変お世話になりました。ここに記して感謝の意とさせていただきます。

参考文献

嶌田貞子：ソフィア・アラベラ・アルウィンの幼児教育思想について(1) ～日系二世女性が幼稚園創設に至った教育思想の一考察～，秋草学園短期大学紀要 34 号，2017 年